迷ランナーズ

はるかな洋上にある未開の孤島、ビクトリーアイランド。年に一度、ブリッツランナー達はここへ集う。

今年もブリッツランナートーナメントまであと二ヶ月。(未開の地なのをいいことに)こそこそと走り込んでいる二人のランナーがいた。去年の大会で注目の的だった二人、フレイ=シルフィードと紅命(くれないみこと)である。

＊　＊　＊

夜。忍者の修行の場所――。

もう、あたしには関係ないんだっけ。あたしはもう忍者じゃないから。ブリッツランナーだから。

夜、ふと目が覚める。気持ちの方はともかく、あたしの体は、まだ忍びの道が名残惜しいらしい。生まれてからずっと忍びの道を歩んできたんだから、すぐにその習慣が抜けるわけ無いと思いつつ、やっぱりちょっとだけ自己嫌悪になることもある。そのうちに、体の方もブリッツランナーになってくれれば、と思う。

とかなんとかいいつつ、夜、修行しているあたしがいる。走るときも音を立てないようにするのがクセになってしまっているから、テントで寝ているフレイを起こす心配はない。

修行の道具がちゃんとあるのがちょっと悲しいところだ。お守りの代わりに一枚だけ、と持ってきた手裏剣は、よく見たら一枚じゃなかった。じゃあどれだけかって、…実戦に使えそうなくらい……。気が付いたら、無意識にこれだけ持ってきてしまってた。

あたし、本当にブリッツランナーになろうとしてるの…？

全部、フレイには内緒にしてある。武器を隠し持ってることがばれたら、何て言われるかわからない。

そんなことを考えながら、あたしは夜のビクトリーアイランドを走る。

……ん？

前方の森に黒い影。走っているみたいだ。今、この

島にはあたしとフレイ以外いないはずで、フレイは今テントでぐっすり寝てるはずなのに。
あたしはその黒い影を追ってみることにした。ついこの前まで忍びの道を歩んできたあたしにとっては、気づかれないように追跡する、何てこと朝飯前だ。
黒い影は走り続けて森を抜け、月明かりでその影がはっきり見えるようになった。影の正体を確かめるのには良いけど、森を抜けたら隠れる場所がないので森からそっと窺うほかにない。
その影はやたらと特徴のある影だった。頭部から二つのひもがのびていて、それぞれ球状のものを付けている。派手に跳ね上がった髪、極めつけに額から突き出た角…。
――フレイ！？
日が昇ると同時に目を覚まし、日が沈むと同時に眠りにつく。三度の食事は欠かすことが無いどころかよく食べ、日が沈んだ後は耳元で赤ん坊が泣こうが蹴り飛ばそうがきんきんに冷えた冷水をぶっかけようが絶対に起きないフレイが。完全に昼型人間のフレイが。
フレイが夜中に走っている。
フレイが。
フレイが。
フレイが…
フレイ…
フレ…
一瞬世界がひっくり返った。
ちょっとやばかったので、あたしはさっさとテントに戻ることにした。…戻るのもむちゃくちゃ苦労したけど。
めまいが…。

結局眠れないまま、テントの中で日の出を待った。フレイがいつも通り日の出きっかりに起きる。
「ん～？起きてたのか、ミコト」
そう言って、彼は大あくびをひとつ。
「さて、トレーニング行きますか～。んじゃ、行って来るから」
「ちょっと待って」
トレーニングが終わった後でもいいのだが、なるべく早くに確かめたいことがある。今確かめておかなければ、あたしの今日の調子に差し支える！…と

言うのが主な理由。
「フレイ、あなた昨日の夜、何してたの？」
「何って…寝てたけど」
　隠す必要のあることでもしていたのだろうか。
「夜間のトレーニングなんてあたしだってしてるし、隠さなくたっていいのよ」
「ちょっと待て。何の話だ？」
「ただ、夜の森はやめておいた方がいいわね。忍者の修行していたあたしにはともかく、夜目の利かない貴方にはちょっと危険だわ」
「だから、何の…」
「注意をしたかっただけよ。そこまでとぼけなくたっていいじゃない」
　一気にしゃべったので、そこまで言って深呼吸。
「あなたが昨日の夜、森で走っていた。それだけの話でしょ」
「だから…俺はいつもどおり寝てたってば」
「あたしだってね、信じられないわよ。一度寝てしまえば、耳元でクラッカー鳴らしてもどんなに強く蹴り入れても起きないあなたが…」
「ちょっと待て。お前、俺にそんなコトしてたのか？！」
　…う。しまった。
「そんなことはどうでも良いのよ！問題は、あなたが夜走ってたってことなのよ」
「うやむやにしようって魂胆が丸見えだぞ、ミコト」
　フレイのクセに、鋭いヤツめ。
「あたしだってねぇ、あなたが何処で走ろうと…いえ、転ぼうが骨折しようがのたれ死のうが知ったことじゃあないのよっ！　ただ、気になったことはすぐ解決。このこと引きずって、あたしの走りに影響しようものならあなたのせいだからね！」
「お前にしか解らん理解不能な理論を俺にかますな！」
　ここまでくると、もう歯止めが利かなくなっていた。
「もう、ワケ解んないヤツね！あなたホントは夢遊病なんじゃないの――――！？」
　あたしの叫びが狭いテントをふるわせた。
「ワケわからんのはそっちだ――――――っ！！」
　今度はフレイの叫びがテントの中で反響した。
「そうね、それがいいわ。夢遊病ってことにしときましょう。あなたが夜テントの周りを徘徊しようと気にしないことにするわ。ただ、あたしのトレーニング

の邪魔をしたり、安眠妨害したりしたらただじゃおかないわよ！…今日からしばらくグラン渓谷のドラゴンバレーで走ってるわ。邪魔しないでよね」
そう言い残して、あたしはテントを出ていった。朝のトレーニングをするために。こんなヤツ、いつまでもかまっていられない。

＊　＊　＊

ひとりで作って食べる食事がこんなにも不経済だったとは。良く解らない理由で良く解らない事態になったが、しょうがないか。無理して一緒に食べるよりずっといい。
洗った半合をテントの中に置いて、ふう、とため息を付く。
テントを出て、上を見上げる。テントの中は窮屈で仕方がない。空の上では太陽がちょうどイイ感じに輝いていて、足下のヨモギやらゼンマイやら、あと森の木々なんかの緑を鮮やかに演出している。
――俺って、しあわせだよなぁ……。
いつもならのんびりと「ここで一句」などとやっているところだが、今日は残念ながらそうもいかない。
今朝の、ミコトのことだ。
ミコト。前から変わったヤツ…というかうるさいヤツだと思ってきたが、とうとう狂ったのだろうか。
言いたい放題いわれただけのこっちは良い気分じゃない。文句らしい文句も言い返せていないのだから。
…ミコト、ある程度冷めたら待っていろ。
それにしても、彼女は動物か何かを見間違えたか。それとも幻覚でも見たのか？
そう確定したいところだが、実は俺にも思い当たる節がある。夢遊病のことだ。
正確には夢遊病ではない。夢遊病とは幼児がかかるもので、脳の機能が未発達のため引き起こされるものなので幼児にしか起こらない。昔から、こういう雑学っぽいことには詳しいんだよな、俺。
…って、今こんなことはどうでもいい。
問題は、夢遊病と似た病気だ。病名は忘れてしまったが、確か…精神的なもので、夢で見たことをそのまま現実でも行動してしまうという病気だ。簡単にいえば、歩く夢を見たとすれば寝たまま起きあがって歩いてしまう。微妙なニュアンスは違うが。

よほど怖い夢を見たり、かなりの精神的負担を負っていない限り起こらないはずだが…。
――どれだけのショックになっているかは不明だが、ここ最近、タイムが全く縮んでいない。そう簡単に縮むものでないのは分かっているが、それどころか、少しずつ遅くなっているような気もする。
去年の予選で前大会チャンピオンを破った意地だってある。去年は予選が終了した時点で台風が上陸し、中止になったが(注・非公式です。念のため)、今年の大会でも目玉になっているハズの俺が無様に予選落ちするわけにはいかない。
そんなプレッシャーもあって、夜に徘徊するようになったのだろうか。俺にはそんな自覚なんて全く無いわけが、精神的なものは自覚の無い場合も結構多いというし。
…となると、精神科医しかないか？　かなりめんどくさいことになった。
ちょっと診てもらって「特に心配いりませんよ」の言葉さえもらえればいいだけだが、現在この島にいる人間は俺とミコトの二人だけだ。もちろん、俺もミコトも精神科医じゃないので、診てもらうんだったらかなり遠くまで行かなきゃならないことになる。
一番近い島で、船で半日。そこもそんなに大きい島ではないので、精神科医なんていないかもしれない。
…困った。ブリッツランナー予選まであと二ヶ月だというのに。
それでもトレーニングを欠かすわけにはいかないので、(ミコトのいるドラゴンバレーとは反対方向の)マイト山へ向かった。

テントからマイト山への通り道にある、海側の河原。
「……？」
何故ここに。問いつめられると思って反対方向に来たのか？　裏をかいたか？
夢ではない。幻影でもない。確かにミコトだ。
トレーニングしているわけではない。河原の石を集め、大きさで分けている。そして、大きいのだけ残して、後は捨てる。
「……？」
さすが元忍者、いつもは隠れていても10メートル以内に入ればすぐに見つかってしまう…が。

今日に限っては、こちらに気が付いていないようだ…？
ミコトはひたすら石を集め続けている。
「……？」
ミコトだ。
でも何かいつもと違う。
この島にいるのは、今はミコトと俺の二人だけだ。いや、正確に言うと、ハトとヒヨコとモグラとタカとドラゴンの親子と旗振ってるタヌキと…とにかく人間はふたりしかいないはずだ。
そういえば、タヌキは人に化けるってだれかが言ってたっけ。ってことは、あれは、ミコトに化けたタヌキ？
おかしなことを考えている間に、タヌキ疑惑のかかったミコトはどこかに行ってしまった。
何だったんだアレは…？
今日は何だかやる気が出なかったから、午前中は軽く走るだけにして昼飯を食いに戻った。

お互いに生活のバランスは崩したくない。ブリッツランナーを目指すものとしては当たり前だからな。
しかし。
この空気はなんとかならないだろうか…。飯もまずくなるし。だからって毎日お互いに一人で作って食べるわけにもいかないし。
ミコトは相変わらずむすっとした顔で鍋を引っかき回している。
「なあ、ミコト…」
「…なによ」
すっさまじい迫力。忍者の目ツキで見るなよ、恐いんだから。
「さっき、河原で何してたんだ？」
ギロ。さっきのに増して鋭い目つきでにらまれた。だから、恐いんだってば。
「イヤ、プライバシーに関わるコトなら別にイイんデスが」
さらに目が細くなる。
なんで俺がこんなに低く出なきゃならないんだ。
「ちょいと気になったもので…」
「フレイ」
「はい？」
ミコトは、ふうと大きなため息を付いて、

「いーかげんにしてよねっっっ！？」
勢いにのせて、更に続ける。
「あたしはずっとドラゴンバレーで走ってたわ！今朝も言ったはずよ。あたしが河原に行くなんて思ったの？ブリッツランナー大会のコースにはなってないし、公式コースに似た所もないのに、行ってどうするのよ、あんなところで走ったら危ないでしょ。河原なんて水をくむくらいだわ。今度は白昼夢？！精神科医に診てもらいなさいよ夢遊病患者！！」
ここまでくると攻撃のひとつもしたくなってくる。
「いいかげんにしろ、ってのはこっちのセリフだな。狂気かミコト？」
「んなっっ狂気？！」
「どっちでもいい！とにかく叫ぶのはやめろ、メシがまずくなる」
「――――っ！」
まだ何か言いたそうだったが、これ以上なにか言ってもラチがあかないと判断したのか黙り込んでくれた。
別に俺は悪くないと思ったけど(事実だし)、ミコトの分の山菜のごった煮を椀によそって渡してやった。
「……」
ミコトは特に何も言わなかったが、もそもそと食べ始めた。
――結局、飯はまずかったけど…。塩味だけではやはり、飽きが来る。

＊　＊　＊

ドラゴンバレーには来るなとだけいいのこして、あたしは午後のトレーニングへ向かった。
一体どうしたんだろうか。昨日まではとくに変じゃなかったのに。同じ志を持つものとして、少しは心配もする。でも、目標を目指す道において差し支えのない範囲での話だ。
フレイが病気だったとして…あたしはどうするんだろう。
近くの島まで付き添いで送っていくくらいはしてあげるわよ。でもその後よ、その後。
この島で、トレーニングを続ける？ひとりで。
この島で、ひとりで、ブリッツランナーを目指すの？

無理だ…できっこない。
だいいちに無人島だし、野生のケモノもうじゃうじゃしてるし、食料とか水とか……。ひとりで生きていけるわけがない。それが当たり前なのはわかってても、支えあってたのが悔しかった。
ドラゴンバレーへの道、川がずっと続いてる。
川面に顔が映る。あたしの顔…
――ミコト、あんたこんなに頼りなかった？
忍びの道を生きてきた、ひとりは慣れてると思ってた、けど…。
まだまだ半人前だなあ…。

……。
なんでっなんでまたいるのよーっ！
前方に見えるは人の影。赤のジャケット、ジーパン、ひざあて、ブーツ、額にツノ、よくわからん球体。…フレイ。
来ないでっていったのに！
わっ、頼むからこっちむかないでよ！
「あ、ミコト！ちょっとこっち来て手伝ってくれないか」
そんなにサワヤカに申されましても。
「……なにやってんの」
「炊き付け用の枯れ葉と薪、集めてる。あと少しなんだ。…ちょっと持ってて」
「わっ」
比較的軽めの枝の束が放り投げられた。あわててキャッチする。
「薪にする木なら残ってたはずだけど」
「今朝、足りないって言ってたじゃないか」
「あたしそんなこと言った？」
「うん。言ったよ」
にっこり笑ってそういうと、手頃な枝を探すのにかがむ。
このさわやかさ。
いままでのフレイにはなかったモノだ。
…どーなってんだか。
「これでよし、と。助かったよ、ありがとうミコト」
「え…うん。はいどーぞ」
預かっていた束をフレイに返すと、それをそっと抱え込んだ。
「じゃあ、おれは一度帰るけど」

「あたしは、ちょっと走ってから帰るわ」
「そうか。じゃあ気をつけて」
フレイはさーっと帰っていった。もちろん薪と枯葉を抱えて。
「…なんだったの今のは」
こう…友好的に出られると、「来るなっていったでしょ！」なんて邪険に追い払えない。
「…場所、かえようっと」
なんだかここじゃ気合が抜けたままの気がしたから。

＊　＊　＊

十八秒・五二。
タイムが戻らない。あと…二ヶ月。
ブリッツランナーの公式コースは三つ。そのひとつはこのマイト山で、俺が最も得意とするコース。直線部分が少なく、ほとんどを岩場を跳んでまわらなくてはならないため、瞬時の加速とジャンプに優れた脚力の本領を発揮できるコース…のはず、なのだが。
得意なコースのはずなのに…こんな調子であと二ヶ月…駄目だ、駄目だ駄目だ！
何が悪かった？　原因として思い当たるフシは何もないというのに。
『フレイ・シルフィード、惜しくも敗退ー！』
『どうしたんでしょうか、去年は前々回のグランド・チャンピオンを破ったことで注目されていた選手でしたよね？』
『そうですね。近年ブリッツランナーは人気の上昇とともに良い選手がたくさん登場していますからね。例えば…』
女性解説員の声が耳をこだまする。ああなんてこだ。
幻聴でないあたりがものすごく怖い。
…って。
「ーテメェかよミコトッッッッッ!!!!!」
「あら、なにかしらぁ～？」
ミコトは、俺が頭抱えてるその耳元で、さきのセリフを呟いていたのだ。
「…イイ趣味してるじゃねぇかよ」
「思い悩んでたりすると本物に思えちゃうのかしら

ねぇ？
　相当ふかぁく悩んでいらっしゃるようで。ねぇフレイ・シルフィードさん」
「そうやってライバルひとり追詰めて楽しいか…？」
「ごめんごめん。ちょっとやりすぎたわ、冗談よ」
　さすがに本気で怒っていると気付いたか、ミコトは笑顔でパタパタと手を振ってごまかした。
「って、ちょっとフレイ。
　なんだってアンタがここにいるわけ？」
「なんだって、って…走ってんだけど。見てわかんねーのか」
　なんでごく普遍のことを問われなきゃいけないんだ。
「そりゃ、走ってるのはわかるわよ。ただ、さっきあたしはドラゴンバレー側の森で小枝と枯葉を集めてるフレイを見て、その直後なんだけど。もうテントまで置きに行ってきたの？」
「…？　俺、今日はそんなことしてないぞ。
　それに炊き付け用の小枝や枯葉ならまだあるし、最近は湿気もないからまだダメになってないはずだろ？　それはミコトだって知っているんじゃないのか」
「でも確かに枯葉を拾ってるフレイを見たわ。
　…ちょっとアンタ、白昼夢でも夢遊病になるまでになっちゃったわけ？」
「だから！　すぐそーやって…」

　　――ヒュ

　突風が言葉をかき消した。
　自然の風ではないのはすぐわかった。あれは間違いなく人為的に起こされた風で、今まで感じた中で最も近い風は…
「待ちなさいッ」
　風の先陣にある影を追って、すぐさまミコトが駆け出した。俺には速すぎて影しか見えないが、忍者である彼女の目にはハッキリと人間のかたちが見えているのだろう。
「待て！」
　ふたりだけで来ているはずの無人島に、俺たち以外の人間がいるとすればそれだけで異常事態。すぐに確認しなければならないわけだが、それでも…
「相手が誰かわからずに突っ走ったら危な…」
　言いかけて気付いた。
　走る速度が速すぎるために既に視界から消えそ

うな彼女の全身が、青白い光を帯びていることに。
――まずい。『忍者くノ一――メイ』モードだ。
「殺す気かミコト！　頼むから落ち着けーッ！」

＊　＊　＊

大会の公式コースにもなっているグラン渓谷・ドラゴンバレー。その、すぐそばに無数にある洞窟のひとつ。影がここに入ったのは間違いない。忍者であるあたしの目を欺けるのは忍者しかいないのだから。
自然が作り出した岩のかたちで、その入口は巧妙にカモフラージュされていた。今まで気付かなかったのも無理は無い。
それにしても、追っている間、影との距離がなかなか縮まらなかったのにはプライドを傷つけられた。
なかなか追いつくことが出来なかったから、影に向けてクナイを二、三放ってみた。もちろん影に命中させようとしたわけではなく、威嚇や足止めのためと思ってしたことだ。でも影は走る速度を少しも緩めようとしなかった。クナイの威嚇に気付かなかったわけでなく、まるで投げられたクナイに殺意が無いのを知っていたような…？　単なる威嚇だというのを見抜いた上で避けようとしなかったのなら、忍者であるあたしとまともに戦える相手だということだ。
…そもそもあたしとまともにはりあえる脚力の持ち主という点で、十分にイレギュラーなのだけど。
洞窟内部から聞こえるのは男の声と女の声。聴覚のみを信用していいなら、ふたりだけのようだ。洞窟はかなり深く、その声の主は奥のほうにいるようで、反響しすぎて忍者の聴覚にもなかなか聞き取りづらい。
でも、どんな相手が出てきても負ける気はしない。
一応の用心をもって洞窟の入口の影に張り付き、観察できる隙をうかがうことにした。

＊　＊　＊

トップスピードのみにおいては、ミコトは全てのブリッツランナー選手の頂点にいる。忍者『メイ』の血が目覚めたミコトに追いつくことはほぼ不可能だが、それでも追わないわけにはいかない。
自分だって、不気味な不自然さを感じて仕方ないのには違いない。
――あの言葉を消した突風に最も近いもの。
駆けるミコトが纏う風。

＊　＊　＊

声のトーンからは、他愛も無い世間話をしているようにしか感じられない。時々かろうじて聞き取れる単語も極めて平和な単語ばかり。
あたしにクナイを投げられたのを気付かなかったとは思えないけど…。気付けば警戒くらいするのが普通だろう。これはちょっと、おかしい。
もう少し会話が聞き取れるように、もし運がよければ姿を確認しようと、奥へ進もうとした、その時。
「おーい、ミコト！　どこだ？」
――あのバカッ！
あんな大声だされたら、隠れていた意味が全然ないじゃない！
「近くにいるんだろ？　返事くらいしろよー！」
こんな大声、洞窟の人間たちに聞こえていないわけが無い。返事なんて、出来るわけない。迂闊に声など出そうものなら、洞窟の中の誰かに攻撃されるかもしれない。
いや、それ以上に。
今の状況下、最も危ないのは危機感がまるで無いフレイだ。
ああもう世話の焼ける。死んだって知らないんだから！　最善は尽くすべく、何かあればすぐ対応できるよう腰の武具に手を掛けた。
しかし、返事は意外な場所から返された。
『…こんにちは～…？』
洞窟のなか。

＊　＊　＊

「なんだ、そんなところにいたのかミコト」
声のした方を見やると、自然の偶然で巧妙にカモフラージュされた洞穴がみえた。ミコトの姿は見えないが、声はそこから聞こえてくる。
グラン渓谷には無数の洞窟が散らばり、公式コースであるドラゴンバレーと呼ばれるゾーンもこの中にある。この島で走るようになってほぼ全てを把握したつもりではいたが、なるほど、あれだけ見つけにくい洞窟では今まで気付かなかったのも納得できる。
「よく気が付いたもんだなぁ、そんな見つけにくい入口なんて」
やはり目の利く忍びだからこそなせる技ということなのだろうか。
『本当に気が付きにくいですよねぇ』
なんだか様子がおかしいと思えるのは気のせいだろうか？
『私も、偶然でなければ見つけることができなかったと思います』
声はどんどん入口へ近づいてきて、ミコトの姿が見えて、そして、
「――――」
そして俺の思考が止まった。

＊　＊　＊

たぶん、フレイよりマヌケな顔をしていたと思う。
知り尽くしていたと思い込んでいたグラン渓谷に未知の横穴があり、そこからあたし…あたしとそっくりな女の子が現れた。
そして、その後から『フレイ』が現れた。
「――」
呆気にとられつつも、なんとか気配は殺しきったままでいられた。でも、状況の判断まで頭が回らない。
ど、ドッペルゲンガー？　自分のそれを見てしまったら、何日か以内に死んでしまうっていう…！
「きゃ、きゃああああっ」
あたしは錯乱のあまり『ミコトとフレイ』にクナイを投げつけた。
クナイは岩に刺さりきらず、前を歩いていた『ミコ

ト』の足元を嫌な音を立てて滑る。
「こんにちはー…ええと、初めまして、ですよね」
この女…クナイ投げつけられといて『ハジメマシテ』なんて、肝が据わってるのかただの天然なのか。
「えーと…あなた方は、フレイさんとミコトさん…ですよね？」
「そ、そうよ！　あたしこそが！　紅命（くれないみこと）よ。アンタたちは何？」
アンタ達は偽者であたし達が本物だ、という言外のセリフを隠そうともせずまくしたてる。
「何、と言われましても…私はミコトです。こっちはフレイ」
『ミコト』の後ろにいる『フレイ』が爽やかに微笑んで軽く頭を下げる。
「あたしがミコトだっていってるでしょ！
なんであたしが、ミコトがふたりもいるのよ！…ついでにフレイも」
ついでかよ、というフレイのつっこみが聞こえたけど、今は気にしない。
「さぁ…どうしてなんでしょう」
その言い方には嫌味の欠片も無く、本当に心の底から解らないと言う感じだ。しばらく首をかしげ、フォローになっていないフォローを始めた。
「随分と警戒なさっいる様子ですけれど、私たち怪しい者ではありませんから安心してください」
そんなこと言われたって、十分怪しい。
仕方ないので、とりあえずは正体を突き止めるための会話を試みる。その天然な性格が、本物か、こちらを油断させるための演義かわからないけれど。
「さっきマイト山の公式コースを横切ったとき、なんで逃げたのよ」
「逃げたわけではないです。止まれなかったんですよ、だってタイムを計測していましたから。…あ、すみません。もしかして何かご用でしたか？」
「も、もういいわ…」
もしかしなくても。コイツ、ただの天然かもしれない。
あたしはその場にガクリと膝をついた。

＊　＊　＊

ミコトがひとしきりうなだれた後、俺はそもそもの疑問を問いかけた。
「あの…キミらもブリッツランナー大会の選手なのか？　さっき見たミコトのそっくりさんの走りも常人しは思えなかったけど…」
「そうだな、おれたちのことを少し説明しておこうか」
と、『フレイ』。
「おれたちは、ブリッツランナー・トーナメントの…まぁバイトってところかな。バイトでも専門職だけど。
ベストテン入りした選手の走りを再現する、トレースとかトレーサーとか言われてる仕事なんだけど」
トレース？
トレーサー？
「去年の大会でも、キミ達の隣で走ったことも何回かあったんだけど。覚えてないかな？」
あ、そういえば。
俺の横を、俺に似た影と色の薄いヤツが走っていたことがあったような。
「そういうわけですから、トップクラスのランナーより更に上を求められるんです。だからこうして練習をしにきているんですよ」と、今度はミコトのトレース。
ここまで聞いて、がっくりと肩を落としていたミコトが復活したようだ。
「――で。そもそもの疑問に戻るけど」
「はい」
「なんであんた、あたしの顔にそっくりなわけ？」
「いえまぁ、いいじゃないですか」
数秒、間があいて。
「だーかーらー！　説明になってないじゃないー！」
――ミコトのトレースは、性格まで似ていなくて良かったな。
半ば現実逃避なことを考えていた。

迷ランナーズ